彙報

最近東洋文庫において蒐集せる西アジア地域の諸文献

昭和三十三年度より、アジア地域の社会・経済に関する総合研究を統合し、計画的に基礎資料を蒐集することを目的として、いわゆる「アジア地域総合研究」が文部省の科学研究費の別枠として発足したが、昨三十五年度をもつて一応総合研究としては打切られた。この間東洋文庫においても榎一雄教授を中心に広くイスラム地域についての専門の研究者の参加を求め、「イスラム地域の社会構造」の研究を分担した。研究費としては初年度三四万、二年度五五万、三年度七十万の配分を受けたのであるが、もとより限られた予算であるので、我が国に殆ど将来されていないイスラム圏諸地域刊行の現地語の文献を中心に、それも地域を限つて重点的に蒐集した次第である。トルコ語文献についてはたまたま護雅夫氏がトルコに留学せられていたのを便宜として、歴史・言語のものを中心に大学および学会等の機関の刊行物を主に蒐集し、その後も出来る限り補充している。またアラビア語文献は嶋田襄平氏に依頼して、イスラム学の基礎的なものを選び、バグダード及びカイロ等の書店に発注したものである。ペルシア文献については、これをサファヴィー朝に限り、本田実信氏が大英博物館所蔵の写本より抽出して、マイクロフィルムによつて将来したものが大部分である。本稿は蒐集に当られた以上の三氏に、それぞれの文献について解説をもとめたものである。

なお、アジア地域総合研究に参加せる諸機関すべてにわたる文献目録が日本学術振興会より第三巻まで刊行されている。

（松村　潤）

一、トルコ語文献

㈠購入先と購入方法。

購入先は、アンカラとイスタンブルとに限られた。

(a)アンカラ。

アンカラには、トルコ革命の直後、ケマル＝アタチュルクの唱道によつてたてられた、「チュルク歴史協会（Türk Tarih Kurumu）」と「チュルク言語協会（Türk Dil Kurumu）」とがあつて、それぞれ、チュルク-トルコ史研究態勢の整備・遺跡発掘調査団の組織と派遣、チュルク-トルコ語の調査研究を行うとともに、チュルク-トルコ史・チュルク-トルコ語に関する重要文献を複製してトルコ語訳し、それに注釈をつけて刊行したり、それとは別に、個人・学会の研究論文・書籍・定期刊行物を出版したりしている。また、これら両協会のほかに、アンカラ大学の「言語・歴史・地理学部（Dil ve Tarih-Coğrafya Fakültesi）」・「神学部（İlâhiyat Fakültesi）」からも、その紀要以外に、数多くの研究論文・書籍が刊行されている。

一九五八年度には、これら、アンカラの各機関の出版物を蒐集するのに力が注がれた。それらの中には、極めて当然のことながら、すでに絶版になつているものも多数存在するが、在トルコ日本大使館、とくに、本多明理事官、高橋昭一副理事官の援助、トルコ側の好意などによつて、神学部の出版物をのぞき、可能な限りの文献を入手することができた。

なお、トルコの古書籍商は、その殆ど全部がインスタンブルに集中しているので、アンカラの古書籍商からは、極めて少数の絶版本そのほかを購入しえたにとどまつている。

(b)　イスタンブル。

一九五九年度には、主として、イスタンブル大学の「文学部(Edebiyat Fakültesi)」・「医学部(Tıp Fakültesi)」、および「チュルク学研究所(Türkiyat Enstitüsü)」・「イスラーム研究所(İslâm Tetkikleri Enstitüsü)」などが出版している紀要・事典・図書を、網羅的に入手するのにつとめたほかに、古書籍商からも、相当数購入した。

このように、一九五八・五九の両年度においては、歴史・言語両協会、アンカラ・イスタンブル両大学、チュルク学・イスラーム両研究所が刊行している出版物を、出来るだけ網羅的に蒐集しようと努力した。しかし、他方では、これら出版物の扱う問題は、のちに掲げる(二)内容の項からもほゞ察せられるように、ひろく各時代・各地域・各分野にわたつているため、例えば、一つの時代・地域・分野に関する研究を集中的に行うに要する文献を、すべて入手するという、いわば組織的・集中的な蒐集方法がとれなかつた。そしてこのことは、また、古書籍商からの購入についても言えるのである。すなわち、トルコの書店は、一般的に、在庫書籍のカタログを常時備えておらず、随時それを作製させて、そのなかから、必要なものを購入せざるをえなかつたからである。

こうした欠陥をみたすため、一九六〇年度以後は、上記の各機関から随時刊行される出版物を継続的に購入するとともに、古書籍商にできるだけ詳細な在庫書籍のカタログを作製、送付させ、そこから、必要なものを、やや組織的に選ぶことにした。例えばイスタンブルの「エリフ書店」は、我々のこのような要請に答えて、「キタプ-ベレテン」と呼ぶカタログを定期的に出版、送付するに至つている。しかし、それにしても、未だ極めて不充分で、蒐集出版物が、その扱う時代・地域・分野からみて分散している、つまり主題的に非常に散漫であるというそしりはまぬがれない。

(註)ここでは、一応、アナトリアの Türk をトルコ、それを含めて中央アジアからシベリアにわたつて居住する Türk 諸族をチュルクと、呼んでおく。

(二)　内容。

トルコ人学者の手によつて行われた、また行われつつあるアナトリア史・チュルク-トルコ史・チュルク-トルコ語研究の成果は、いままで、我国には、ほとんど紹介されていない。したがつて、一九五八-六〇年度においては、まずそれら、トルコ人学者による研究成果を吸収すべきである、という見地から、若干の複

製・飜訳・註釈をのぞいては、学術雑誌・書目・事典・辞典・研究図書の蒐集に重点をおき、根本史料の購入は、全くこれを行わなかつた。つぎに、我々の蒐集しえたトルコ語文献のうちから、主要なものだけをあげておくことにする。

(a)学術雑誌・紀要。

Türk Tarih Kurmu, Belleten (チュルク歴史協会「ベレテン」)、Türk Dil Kurumu, Türk Dili Araştırmaları Yıllığı (チュルク言語協会「チュルク語研究年報」)、Türk Dili (同上「チュルク語」)、Dil ve Tarih-Coğrafya Fakültesi Dergisi (アンカラ大学「言語・歴史・地理学部紀要」)、Dil ve Tarih-Coğrafya Fakültesi Yıllık Çalışmaları Dergisi : Türk Dili ve Edebiyatı-, Tarih-, Antroploji ve Etnoloji-, İndoloji-, Sinoloji-, Arkeoloji-Sumeroloji-Araştırmaları (「言語・歴史・地理学部年間研究報告: チュルク語・文学、歴史、人類学・民族学、印度学、支那学、考古学、スメル学研究」)、Türkiyat Enstitüsü, Türkiyat Mecmuası (チュルク学研究所「チュルク学雑誌」)、Türk Hukuk ve İktisat Tarihi Mecmuası (同上「チュルク法律・経済史雑誌」、İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi, Tarih Semineri Dergisi (イスタンブル大学文学部「歴史学科紀要」)、Tarih Dergisi (同上「史学雑誌」)、Türk Dili ve Edebiyatı Dergisi (同上「チュルク語・文学雑誌」)、İslâm Tetkikleri Enstitüsü Dergisi (同上「イスラーム研究所紀要」)、Şarkiyat Mecmuası (同上「東方学雑誌」)、Anadolu Araştırmaları (同上「アナトリア研究」)、Türk Antropoloji Mecmuası (同上「チュルク人類学雑誌」)、Coğrafî Araştırmalar (同上「地理研究」)、Felsefe Arkivi (同上「哲学雑誌」)、Türk Folklor Araştırmaları (「チュルク民俗学研究」)、そのほか。

(b)書目。

Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi Türkçe Yazmalar Kataloğu (「トプカプ-サライ博物館図書館所蔵チュルク語写本書目」)、İstanbul Üniversitesi Kütüphanesi Farsça Basmalar Kataloğu (「イスタンブル大学図書館所蔵ペルシア語刊行物書目」)、İstanbul Belediye Kütüphanesi Alfabetik Kataloğu (「イスタンブル市立図書館所蔵図書アルファベット順書目」)、Türkiye Tarih Yayınları Bibliyografyası (「トルコ歴史出版物書目」)、Yeni Yayınlar Aylık Bibliyografya Dergisi (月間新刊図書目録雑誌」)、Cavit Orhan Tütengil, Ziya Gökalp Hakkında bir Bibliyografya Denemesi (「ズィヤ-ギョカルプ関係書目試論」)、Müjgân Cunbur, Türk Kadın Yazarların Eserleri, Bibliyografya (「トルコ女流作家著作集、書目」)、Sami N. Özerdim, Atatürk için yazılmış Yazıların Bibliyografyası (「アタチュルク関係文献書目」)、Akdes Nimet Kurat, Ortazaman Tarihi için Kısa bir Bibliyografya「中世史関係小書目」)、Türkiyenin Antik Devirdeki Meskûkâtına dair Bibliyografya (「トルコ古代貨幣書目」)、Muzaffer Gökman, İstanbul Kütüphaneleri ve Yazma Tıp Kitapları (「イスタンブル諸図書館所蔵医学関係写本書目」)、Arif Müfid

Mansel, Türkiyenin Arkeoloji, Epigrafi ve tarihî Coğrafyası için Bibliyografya (「トルコの考古学・金石学・歴史地理学書目」)、そのほか。

(c)事典・辞典。

İslâm Ansiklopedisi(「イスラーム百科事典」)、Behçet Nacatigil, Edebiyatımızda İsimler Sözlüğü (「トルコ文学事典」)、Mustafa Nihat Özön, Edebiyat ve Tenkid Sözlüğü (「文学・評論事典」)、Ansiklopedik Politika Sözlüğü (「政治学百科事典」)、Ansiklopedik Coğrafya Sözlüğü (「地理学百科事典」)、Türk Dil Kurumu, Tanıklariyle Tarama Sözlüğü (「実地調査によるトルコ語辞典」)、Mehmet Ali Ağakay, Türkçede Mecazlar Sözlüğü (「トルコ語比喩辞典」)、Do., Türkçede Yakın Anlamlı Kelimeler Sözlüğü(「トルコ語類語辞典」)、Hüseyin Kâzim Kadri, Türk Lûgatı (「チュルク〔語〕辞典」)、Mustafa Nihat Özön, Osmanlıca-Türkçe Sözlük (「オスマン語—現代トルコ語辞典」)、Mehmet Ali Ağakay, Türkçe Sözlük (「トルコ語辞典」)、J. K. Birge, Yeni Redhouse Lûgatı: İngilizce-Türkçe (「ンドくウス新英土辞典」)、Tarhan Kitabevi, Türkçe-İngilizce Büyük Lûgat (タルくン書房編「土英大辞典」)、İsmail Hami Danişmend, Fransızca-Türkçe Resimli Büyük Dil Kılavuzu (「挿絵入り仏土大辞典」)、Türk Dil Kurumu, Türkçe Sözlük (「トルコ語辞典」)、Anthony Thompson, Dört Dilde Kütüphanecilik Terimleri Sözlüğü (「四ケ国語、図書館学用語辞典」)、そのほか。

(d)根本史料の複製、飜訳及び註釈。ここでは、とくに目立つたものだけをあげることにとどめる。

Besim Atalay, Divanü Lûgat-it-Türk: Tıpkıbasım (写真版), Tercüme (飜訳), Dizinler (アラビア文字・ローマ字順索引)、Türk Dil Kurumu, Kutadgu Bilig: Tıpkıbasım (カイーン・フェルガナ・エジプト諸版本写真版)、Reşid Rahmeti Arat, Kutadgu Bilig: Metin (ローマ字転写本文), Tercüme(飜訳)、Pertev Naili, Köroğlu Destanı (「キョロウル物語」)、Bang ve Rahmeti, Oğuz Kağan Destanı (「オウズ可汗物語」)、Muharrem Ergin, Dede Korkut Kitabı (「デデ＝コルクト物語」)、Saadet Çagatay, Altun Yaruk'tan iki Parça (「ウイグル文金光明最勝王経〔二節〕飜訳)、Do., Türk Lehçeleri Örnekleri (「チュルク諸語の文例」)、Fuat Köprülü, XVIIInci Asır Sazşairlerinden Kayıkçı Kul Mustafa ve Genç Osman Hikâyesi (「一七世紀の吟遊詩人、カイクチ＝クル＝ムスタファとゲンチ＝オスマンの物語」)、Zeki Velidi Togan, Horezmce Tercümeli Muqqadimat al-Adap (「ホラズム語訳文学叙論」)、Ahmet Caferoğlu, Kitâb al-İdrâk il-lisân al-Atrâk (「トルコ語の智識」)、Velet İzbudak, El-İdrâk Haşiyesi(同上註釈)、Ahmed Ateş, Kitâb Tarcumân al-Balâga、Robert Anhegger ve Halil İnalçık, II. Mehmed ve II. Bayezid devirlerine ait Yasakname ve Kanunnameler (「メフメト二世・バイェズイト二世時代の律法〔本文・解説・写真版〕」)、Ahmed Ateş, Câmi al-Tavārikh, II. Cild, 4. Cüz (「集史」第二巻、

第四部〔スルタン＝マフムドとその時代史〕」)′ Pîrî Reis, Kitab-ı Bahriye (「海事の書」)′ Mşkûre Eren, Evliya Çelebi Seyahatnâmesi birinci Cildin Kaynakları üzerinde bir Araştırma (「エヴリヤ＝チェレビ旅行記第一巻の資料に関する一研究」)′ Ahmet Temir, Caca Oğlu Nur el-Din' in 1272 tarihli Arapça-Moğolca vakfiyesi (「ジャジャ＝オウル＝ヌレッディンの′一二七二年附アラビア語—蒙古語寄進状」)′Necati Lugal, Zafernâme (「ザファルナーメ飜訳」)′ Ahmed Ateş, Sindbād-Nāme(「スインドバド-ナーメ写真版」)′ Abdülbâki Gölpınarlı, Vilâyet-Nâme (「ベジ＝ベクタシ伝」)′ Tahsin Yazıcı, Manâkib al 'ârifîn (「賢者列伝」)′ Abdülkadir Karahari, İslâm-Türk Edebiyatında Kırk Hadis (イスラーム—トルコ文献に於る四十聖伝〔蒐集・飜訳・註釈〕」)′ Necati Lugal, Ahbâr üd-Devlet is-Selçukiyye (「セルジュク王朝史〔ペルシア語からの飜訳〕」)′ Kuran (「コーランの現代トルコ語訳」)′ そのほか。

(e)　チュルク—トルコ語学及び方言調査。

Jeam Deny, Türk Dili Grameri : Osmanlı Lehçesi (「トルコ語文法′オスマン語」)′ Muharrem Ergin, Türk Dil Bilgisi (「チュルク語学」)′ Ahmet Caferoğlu, Türk Dili Tarihi (「チュルク語史」)′ Muzaffer Tansu, Türk Dilinin Entonasyonu tecrübî Etüd (「チュルク語音調研究試論」)′ Zeynep Korkmaz, Güney-Batı Anadolu Ağızları Ses Bilgisi (「南西アナトリア方言音声学」)′ Ömer Asım Aksoy, Gaziamtep Ağzı (「ガジアンテプ方言」)′ Ahmet Caferoğlu, Orta-Anadolu Ağızlarından Derlemeler (「中部アナトリア方言集」)′ Do., Doğu İllerimiz Ağızlarından Toplamalar (「東部諸地域方言集」)′ Do., Anadolu Dialektolojisi üzerine Malzeme (「アナトリア方言学資料」)′ Do., Güney-Doğu İllerimiz Ağizlarından Toplamalar (「南東部諸地域方言集」)′ そのほか。

(f)　個人全集′選集

İ.E., Ertaylan, Külliyyât-ı Dîvân-i Mevlânâ Hâmidî (「メヴラーナ詩集」)′ Do., Külliyyât-ı Dîvân-i Kabulî (「カブリー詩集」)′ Şinasi, Külliyât (「シナスイ全集」)′ Namık Kemal, Külliyât (「ナムク＝ケマル全集」)′ Ahmet Hamdi Tanpınar, Namik Kemal Antolojisi (「ナムク＝ケマル名詩選」)′ Fevziye Abdullah Tansel, Ziya Gökalp Külliyati (「ズイヤ＝ギョカルプ全集」) など。

(g)　伝記。

Yunus Emre, Tokatli Gedâyî, Ahmed-i Dâ'î, Fârâbî, Fuzulî, İbni Sina, Naimâ, Mehmet Âkif, Erzurumlu Emrah, Kâtip Çelebi, Abdülhak Hâmit Tarhan, Ahmet Mithat Efendi, Namık Kemal, Yahya Kemal そのほか′多くの思想家・芸術家・政治家の伝記が′相当数多く蒐集せられたし′また′例えば′Abdülbâki Gölpınarlı, Yunus Emre ve Tasavvuf (「ユヌス＝エムレと神秘主義」)′ A. Süheyl Ünver, Fârâbi Tetkikleri (「ファーラービー研究」)′ Zeynep Korkmaz, Fuzulî'nin Dili ha-

kkında Notlar（「フズーリーの言語についての覚書」）などの研究書も幾つかある。そのほか、日本の文庫本にあたる Türk Klâsikleri（「チュルク古典全集」）には、非常に多くの人物の伝記・著作が収録されている。

(h) そのほかの学術図書。

蒐集刊行物のうち、一番多数を占めているのは、種々の個別的テーマに関する学術研究図書であつて、我々は、これらによつて、トルコに於るチュルクートルコ学研究の成果を知りうるのであるが、ここでは、主なるものに限つても、そのすべてを枚挙する遑は到底ない。以下、㈠文学、㈡考古学、㈢歴史学、㈣美術・建築、㈤民俗学に分けて、それぞれに代表的なるもの、数点をあげるにとどめたい。

㈠ 文学。

Ali Nihad Tarlan, Divan Edebiyatında Tevhidler（「ディーヴァーン詩文学全集」）、Hasan Eren, Türk Saz Şairleri hakkında Araştırmalar（「チュルク吟遊詩人の研究」）、M. İlhan Başgöz, Türk Halk Edebiyatı Antolojisi（「チュルク民衆文学名詩選」）、Ahmet Hamdi Tanpınar, XIX Asır Türk Edebiyatı Tarihi（「一九世紀トルコ文学史」）、Güzin Dino, Tanzimattan sonra Edebiyatta Gerçekçiliğe doğru（「タンズィマート以後の文学に於る写実主義的傾向」）、Kenan Akyüz, Batı Tesirinde Türk şiiri Antolojisi（「ヨーロッパの影響をうけたトルコ名詩選」）、Fuat Köprülü, Türk Dili ve Edebiyatı hakkında Araştırmalar（「チュルク語・文学研究論文集」）など。

㈡ 考古学。

冒頭に一言したように、「チュルク歴史協会」は、チュルクートルコ史研究組織を整備するほかに、殆ど毎年、アナトリア各地に遺跡発掘・調査団を派遣し、その成果を出版している。以下にあげるのは、それら発掘報告書のごく一部にすぎない。

Şevket Aziz Kansu, Türk Tarih Kurumu tarafından yapılan Etiyokuşu Hafriyatı raporu（「チュルク歴史協会によつて行われたエティヨクシュ発掘報告書」）、Remzi Oğuz Arık, Türk Tarih Kurumu tarafından yapılan Alaca-Höyük Hafriyatı（「アラジャ＝ヒョユク発掘」）、Tahsin Özgüç, Horoztepe（「ホロズテペ」）、Ekrem Akurgal, Phrygische Kunst, Mebrure Tosun, Mezopotamya Silindir Mühürlerinde Hurri-Mitanni Üslûbu（「メソポタミア円筒封印に於るフルリーミタンニ様式」）、など。

㈢ 歴史学。

まず、チュルクートルコ史一般に関するものとしては、Zeki Velidi Togan, Tarihte Usul（「史学概論」）、Osman Turan, Tarihî Kronolojisinin Esasları（「歴史年代学の基礎」）、Do., Oniki Hayvanlı Türk Takvimi（「チュルクの十二支暦」）、Hüseyin Namık Orkun, Türk Tarihi（「チュルク全史」）、Affet İnan, Tarih üzerine İnceleme ve Makaleler（「史学研究と論文」）などが、また、セルジュク朝史としては、Mükrimin Halil Yınanç, Türkiye Tarihi: Selçuklular Devri（「トルコ史：セルジュク朝時

代」)′ İbrahim Kafesoğlu, Sultan Melikşah Devrinde Büyük Selçuklu İmparatorluğu (「スルタン＝メリクシャー時代の大セルジュク帝国」)′ Mehmed Altay Köymen, Büyük Selçuklu İmparatorluğu Tarihi (「大セルジュク帝国史」)′ Osman Turan, Türkiye Selçukluları hakkında resmî Vesikalar (「ルム＝セルジュク朝関係の公文書〔本文・飜訳・研究〕」)′ Do.,Moğollar Zamanında Türkiye Selçukluları Tarihi (「モンゴル時代のルム＝セルジュク朝」)′ Kıvameddin Burslan, Irak ve Horasan Selçukluları tarihi (「イラク及びホラサンのセルジュク朝史」)などが′そらに′中央アジア史については′ M. Hakkı, Orta Asya'da Arap Fütuhatı (「中央アジアに於るアラブの征服」)′ İbrahim Kafesoğlu, Harezmşahlar Devleti Tarihi (「くーリズムシャー国史」)′ Zeki Velidi Togan, Bugünkü Türkili (Türkistan) ve yakın Tarihi (「今日のトルキスタン′及びその近代史」)などが′それぞれ目立つている。

ところで′トルコにおけるチュルクートルコ史研究にあつて′一番光彩をはなつている分野は′オスマン朝史であるが′これに関する研究図書も′非常に多量に購入することができた。以下′代表的なものだけをあげておく。まず′ウズンチャルシリ (İ.H. Uzunçarşılı) の大著′ Osmanlı Tarihi (「オスマン朝史」)以下′ Osmanlı Devleti Teşkilâtından Kapuklu Ocakları (「オスマン国家組織中の近衛軍団」)′ Osmanlı Devletinin Saray Teşkilâtı (「オスマン国家の宮廷組織」)′ Midhat Paşa ve Tâif Mahkûmları (「ミドハト＝パシャとターイフ裁判」) そのほかの力作があるが′上述の「オスマン朝史」の第六・七巻 (改革勅令期以後) は Enver Ziya Karal の執筆にかかつている。つぎに′スルタン＝メフメト二世 (征服王) については′ Selâhattin Tansel, Osmanlı Kaynaklarına göre Fatih Sultan Mehmed'in siyasî ve askerî Faaliyeti (「オスマン朝史料より見たる′ファティフ＝スルタン＝メフメトの政治的・軍事的活動」)′ A. Süheyl Ünver, Fâtih Sultan Mehmed'in Ölümü ve Hâdiseleri üzerine bir Vesika (「ファティフ＝スルタン＝メフメトの死と事件に関する一史料」)′ Refik Ahmet Sevengil, Fatih Devrinde Âlimler, Sanatkârlar ve Kültür Hayatı (「ファティフ治世下に於る学者・芸術家及び文化生活」)′ Muin Memduh Tayanç, Fatih ve Güzel San'atlar (「ファティフと芸術」)などがある。また′トルコの外交史を専問とするアクデス＝ニメト＝クラト (Akdes Nimet Kurat) の′ Topkapı Sarayı Müzesi Arşivindeki Altın Ordu, Kırım ve Türkistan Hanlarına ait Yarlık ve Bitigler (「トプカプ＝サライ博物館所蔵公文書中の′金帳汗図′クリム・トルキスタン諸汗の勅令と文書」)′ İsveç Kıralı XII Karl'ın Hayatı ve Faaliyeti (「スウェーデン王カルル十二世の生涯とその活動」)′ İsveç Kıralı XII Karl'ın Türkiye'de kaldığı Zamana ait Metinler ve Vesikalar (「スウェーデン王カルル十二世のトルコ滞在当時の史料′公文書」)′ İsveç Kıralı XII Karl'ın Türkiye'de Kalışı ve bu Sıralarda Osmanlı İmparaluğu (「スウェーデン王カルル十

二世のトルコ遠征と、当時のオスマン帝国」)、Prut Seferi ve Barışı(「プルト遠征と講和」)、Türk-İngiliz Münasebetlerine kısa bir Bakış (1553-1952) (「土英関係小論」) などの書物が見えている。さらに、いわゆる改革時代以後のオスマン朝史については、Enver Ziya Karal, Selim III. ün Hatt-ı Humayunları (「セリム三世の勅令集」)、Reşat Kaynar, Mustafa Reşit Paşa ve Tanzimat (「ムスタファ＝レシト＝パシャとタンズィマート」)、Halil İnalçık, Tanzimat ve Bulgar Meselesi (「タンズィマートとブルガリア問題」)、Selek Yayınevi, Abdülhamid'in Hatıra Defteri (セレク出版社「アブデュルハミトの覚書」)、M. Çagatay Uluçay, 18 ve 19. Yüzyıllarda Saruhan'da Eşkıyalık ve Halk Hareketleri (「一八・一九世紀におけるサルハンに於る叛乱と民衆運動」)、Cemal Tukin, Osmanlı İmparatorluğu Devrinde Boğazlar Meselesi (「オスマン帝国時代の海峡問題」) などがあり、同じく、この時代の歴史に関する外国語の文献が、Kalost Arapyan, Rusçuk Âyânı Mustafa Paşa'nın Hayatı ve Kahramanlıkları (「ルスチュクの首長ムスタファ＝パシャの生涯とその壮挙「アルメニア語」」)、Max Silberschmidt, Venedik Menbalarına nazaran Şark Meselesi (「ヴェニス諸史料から見た東方問題「ドイツ語」」) などとして、また、モルトケ (Helmuth von Moltke) の書簡が、Türkiye'deki Durum ve Olaylar üzerine Mektuplar (1835—1839) (「トルコの状勢・事件に関する書簡集」) として、それぞれ、トルコ語訳されている。そのほかに、ルーメリアについては、Tayyib Gökbilgin, Rumeli'de Yürükler, Tatarlar ve Evlâd-ı Fatihân (「ルーメリアに於る遊牧民・タタール及び征服民」)、Do., Edirne ve Paşa Livâsı (「アドリアノープルとパシャ地域」)、Oktay Aslanapa, Edirne'de Osmanlı Devri Âbideleri (「アドリアノープルに於るオスマン朝時代の紀念碑」)、Hamdi Kresevlakoviç, Çengiç Beyleri: Osmanlı Devirnde Bosna-Hersek Feodalizmi hakkında bir Etüd (「チェンギチ諸侯：オスマン朝時代に於るボスニア－ヘルツェゴヴィナ封建制の一研究」) などがあるが、Ömer Lûtfi Barkan, XV ve XVI ıncı Asırlarda Osmanlı İmparatorluğunda ziraî Ekonominin hukukî ve malî Esasları (「一五・一六世紀のオスマン帝国に於る農業経済の法的・財政的基礎」)、Cevat Üstün, 1683 Viyana Seferi (「一六八三年のウィーン遠征」)、M. Münir Aktepe, Patrona İsyanı (1730) (「パトロナの叛乱」)、Fahri Dalsar, Türk Sanayi ve Ticaret Tarihinde Bursa'da İpekçilik (「トルコ商工業史に於るブルサの絹織物業」) などもまた、それぞれの領域に於て注目に値する力作である。

つぎに、トルコ革命に関してはまず、Yusuf Hikmet Bayur, Türk İnkilâbı Tarihi (「トルコ革命史」)、Kâzım Karabekir, İstiklâl Harbimiz (「我々の独立戦争」) が、概括的な、しかし正確な知識を与えてくれるが、個々の問題については、Samih Nefiz Tansu が Galib Vardar から聞き書きして出版した İttihat ve Terakki içinde Dönenler (「統一進歩派内の人々」)、Ahmed Bedevî Kuran, Osmanlı İmparatorluğunda İnkilâp Hareketleri

ve millî Mücadele（「オスマン帝国に於る革命運動と民族的闘争」）′ Tarık Z. Tunaya, Hürriyetin İlânı : İkinci Meşrutiyetin siyasî Hayatına Bakışlar（「自由の宣言：第二次立憲制の政治史研究」）′ Do., Türkiye'nin siyasî Hayatında Batılılaşma Hareketleri（「トルコ政治史に於るヨーロッパ化運動」）′Reşat Kaynar, Türikiye' de Hukuk Devleti kurma Yolundaki Hareketler（「トルコに於る法治国家形成のための諸運動」）′ Server R. İskit, Türkiye'de Matbuat Rejimleri（「トルコに於る新聞制度」））などがある。さらに′このトルコ革命は′いうまでもなくケマル＝アタチュルクを除いては′論ずることができないが′かれに関する最近の研究として′ Nihad Reşad Belger からの聞き書き′ Atatürk'ün Hastalığı（「アタチュルクの病気」）′Ahmet Cevdet Emre, İki Neslin Tarihi : Mustafa Kemal Neler yaptı ?（「二世代の歴史：ムスタファ＝ケマルの業績」）がある。

(ニ) 美術・建築。

チュルクートルコ美術一般の概説としては′ Ernst Diez ve Oktay Aslanapa, Türk Sanatı（「チュルク芸術」）′ Do., Karaman Devri Sanatı（「カラマン朝の芸術」）がすぐれているが′特に′城塞・城壁については′ Nazmi Sevgen, Anadolu Kaleleri（「アナトリアの城塞」）′ Feridun Dirimtekin, Fatih'ten önce Haliç Surları（「ファティフ以前の金角湾城壁」）などが′また′建築・寺院に関しては′ Ekren Hakkı Ayverdi, Fatih Devri Mimari Eserleri（「ファティフ時代の建築作品」）′ Aziz Ogan, Kaariye Camii（「カーリエ寺院」）′ A. Süheyl Ünver, Fatih Külliyesi Camii（「ファティフ＝キュルリエ寺院」）′ Do., Yeşil Türbesi Mihrâbı（「イェシル霊廟の祭壇」）′そのほかが′さらに′泉・宮殿建築については′ İbrahim H. Tanışık, İstanbul Çeşmeleri（「イスタンブルの泉」）′ Osman Ritat, Edirne Sarayı（「アドリアノープル宮殿」）などが′それぞれ注目に値する。また′ Kurt Erdmann, Der türkische Teppich des 15. Jahrhunderts′ Oktay Aslanapa, Osmanlılar Devrinde Kütahya Çinileri（「オスマン朝時代のキュタヒヤ陶器」）は′ほかのイスラーム世界の影響をうけつつも′独自の発展をとげた′トルコの鐵瓶・陶器芸術に関して′我々に教えるところが多い。′ A. Süheyl Ünver, Geçmiş Yüzyıllarda Kıyafet Resimlerimiz（「過去数世紀に於けるトルコの服装絵画」）は′民俗学的にも興味深い。

(ホ) 民俗學

つぎに′トルコのイスラーム教に大きい影響を与えているといわはれる（キョプルル説）シャマニズムについては′ Abdülkadir İnan, Tarihte ve Bugün Şamanizm（「シャマニズムの過去と現在」）があり′また′トルコで独特の発達をしたカラギョズ（影絵人形芝居）に関しては′ Selim Nüzhet Gerçek, Türk Temaşası: Meddah Karagöz Ortaoyunu（「トルコ劇：カラギョズ人形芝居」）′ Orhan Şaik Gökyay, Türklerde Karagöz（「チュルク族のカラギョズ」）が見えている。また′ Hâmit Zübeyr Koşay, Türkiye Türk Düğünleri üzerine mukayeseli Malzeme は′「アナトリア＝ト

ルコ族の結婚式に関する比較資料」を非常に多く蒐集している点で、極めて便利である。そのほか、トルコの民謡集、サズ（マンドリンに似た楽器）曲集、民衆舞踊、ことわざ・格言集、謎々を集めたもの、さらに「ナスレッディン＝ホジャ物語集」の各版本も購入しえた。(註)

以上、我われの蒐集したトルコ語文献を、(a)学術雑誌・紀要、(b)書目、(c)事典・辞典、(d)史料の複製、飜訳、註釈、(e)チュルク―トルコ語学及び方言調査、(f)個人全集・選集、(g)伝記、(h)そのほかの学術図書（(イ)文学、(ロ)考古学、(ハ)歴史学、(ニ)美術・建築、(ホ)民俗学）の各項目に分け、それぞれに代表的と思われるものを幾つかあげてきた。しかしここにあげたのは、上にも一言したように、特に主要なものだけであつて、なかでも、(h)項には、ここで言及すべくして言及しえなかつた図書も多い。それらについては、いずれ出版されるはずの総合目録を見られたい。

(註) 我われの購入した「ナスレッディン＝ホジャ物語集」の各版本の説明は、極めて簡単ながら、拙稿「ナスレッディン＝ホジャ物語――ホジャとティムールー」（遊牧社会史探求第一四冊）、「ナスレッディン＝ホジャ物語」（史学雑誌七〇―一〇）、「ナスレッディン＝ホジャとその物語について」（オリエント学会会報（未刊））において、これを行っておいたので、参照していただければ幸である。

(三) 成果と課題。

いままで、我国へは、トルコで出版されたトルコ語文献は、偶然的、したがつて散発的にしか入つて来ず、我われは、トルコ人学者の手によるアナトリア史・チュルク―トルコ史・チュルク―トルコ語研究の成果をうかがうに由なかつた。しかし、一九五八―六〇年度の蒐集計画によつて、我われは、五〇〇冊以上にのぼるトルコ語出版物を入手することができた。これで充分などというつもりはさらさらないが、それにしても、これらが、今後の我国におけるイスラーム世界研究の上に果すであろう役割は、決して少くはあるまい。

ただし、問題は残つている。すなわち、それは、さきにも一言したように、今度の計画では、トルコ人学者の研究成果を、まず、吸牧すべきである、という見地から、幾つかの史料の複製・飜訳・註釈をのぞいては、学術雑誌・書目・事典・辞典・研究図書の購入に重点がおかれ、根本史料それ自身の蒐集は、全く行われなかつた、ということである。根本史料のトルコ国外への分散は、トルコ政府が厳禁するところであり、また、それら根本史料の整理・出版も、遅々として進んでいないから、その蒐集は、目下のところ、非常に困難ではあるが、どうしてもやられねばならぬことの一つであろう。

いままでのべてきた、一応の成果を土台にして、今後は、各時代・各地域、また、各分野について、組織的・集中的に購入し、それぞれの研究に、必要にして充分なる文献をあつめることもまた、忘れられてはなるまい。

（護雅夫）――一九六一・一二――

二、アラビア語文献

アジア地域総合研究における東洋文庫班の課題は「イスラーム諸国の社会構造」とされているが、このような限定された課題だけに限つてアラビア語の文献を集めることは非常に困難であるばかりでなく、我が国における将来のイスラーム学の発展のために、かならずしも賢明な方法であるまい。現在の急務は、イスラーム学の各部門にわたつた広く基本的な文献を蒐集することにある。さてイスラームの学問は、古来、イスラーム固有の学問と外来の学問とに分類されている。このうち、外来の学問は主として哲学と自然科学とからなり、我われのこの度の文献蒐集の主たる対象は、イスラーム固有の学問にある。これは我われの現代風の分類によれば、法学・神学・史学・文学からなつている。次に我われの蒐集しえたアラビア語文献のうち特に重要なものを、この分類に従いつつ解説することにする。

(一) 法学

イスラーム正統派の法律学派の基本的文献がそろつた。すなわち、マーリク派の祖マーリク・ビン・アナスの「ムワッタ」(408 Mālik b. Anas: al-Muwaṭṭa'.) と「ムダワンナ」(407 Mālik b. Anas: al-Mudawanna al-Kubrā.) ハナフィー派の学者アブー・ユースフの「ハラージュ」(410 Abū Yūsuf: Kitāb al-Kharāj.) とシャイバーニーの「ジャーミー」(480 al-Shaybānī: al-Jāmi' al-Kabīr.) シャーフィイー派の祖シャーフィイーの「ウム」(524 al-Shāfi'ī: Kitāb al-'Umm.) ハンバル派の祖イブン・ハンバルの「ムスナド」(409 Ibn Ḥanbal: al-Musnad.) がそれである。個々の法学者を調べる場合には、シーラーズィーの「法学者列伝」(457 al-Shīrāzī: Ṭabaqāt al-Fuqafā'.) アブー・ヤーラーの「ハンバル派学者列伝」(431 Abū Ya'lā al-Ḥanbalī: Ṭabaqāt al-Ḥanābila.) スブキーの「シャーフィイー派学者列伝」(449 al-Subkī: Ṭabaqāt al-Shāfi'iya al-Kubrā.) が役に立ち、各学派間の学説の相違を調べる場合には、タバリーの「法学者間の相違」(427 al-Ṭabarī: Kitāb Ikhtilāf al-Fuqahā'.) や、アンサーリーの「アブー・ハニーファとイブン・アビー・ライラーとの相違」(461 al-Anṣārī: Ikhtilāf Abī Ḥanīfa wa Ibn Abī Laylā.) などがある。ワキーアの「裁判官情報」(462 Wakī': Akhbār al-Quḍā) は、他に例のない歴史的な判例集として重要なものであり、各地域ごとにまとめた裁判官の列伝もある (424 al-Kindī: Kitāb al-Quḍā alladhīn walaw Quḍā' Miṣr. 430 al-Nubāhī al-Andalusī: Ta'rīkh Quḍā al-Andalus. 496 al-Ja'dī: Ṭabaqāt Fuqafā' al-Yaman.)

(二) 神学

イスラーム学はコーラン研究にはじまる。この領域では、タフシールと称せられるすこぶる大部の文献があるが、そのうち、タバリー (389 al-Ṭabarī: Tafsīr (Jāmi' al-Bayān).) ラージー (390 al-Rāzī: al-Tafsīr al-Kabīr.) ザマフシャリー (510 al-Zamakhsharī: al-Kashshāf.) などの著名なものと、最近の学者の

もそろい、クルアーン関係の文献の重要なものは、かなりよく蒐集された。シーア派の史料としては、ナウバフティーの「シーア諸派」(422 al-Nawbakhtī : Firaq al-Shī'a.) とイブワーン・アッサファーの「書翰」(494 Ikhwān al-Ṣafā' : Rasā'il.) とがあり、狭義の神学に関するものでは、アッシュアリー (450 al-Ash'arī : al-Lumā. 498 al-Ash'arī : Maqālāt al-Islāmiyīn.) および、ガッザーリーの (445 al-Ghazzālī : Iḥyā' Ulūm al-Dīn. 456 al-Ghazzālī : Fī Mawkib al-Da'wa. 513 al-Ghazzālī : al-Iqtiṣād fī al-I' tiqād.) などの著書がある。

㊂ 史学

総合史(世界史)に属するものに、イブン・アルアスィールの「全史」(481 Ibn al-Athīr: al-Kāmil fī al-Ta'rīkh.) ダイナワリーの「事史」(423 al-Daynawarī: Kitāb al-Akhbār al-Ṭiwāl.) ヤークービーの「歴史」(400 al-Ya'qūbī : Ta'rīkh.) イブン・タバターバーの「王朝史」(454 Ibn Ṭabaṭabā: Ta'rīkh al-Duwal al-Islāmīya) があり、特殊史には、ザハビーの「イスラーム史」(523 al-Dhahabī : Ta'rīkh al-Islām.) スユーティーの「カリフ史」(515 al-Suyūṭī : Ta'rīk hal-Khulafā'.) バラーズリーの「征服史」(468 al-Balādhurī : Futūḥ al-Buldān. 499 al-Balādhurī: Futūḥ al-Buldān) があり、エジプト史にイブン・イヤース (488 Ibn Iyās: Ta'rīkh Miṣr.) イブン・アルフラート (399 Ibn al-Furāt : Ta'rīkh.) イブン・アブダルカム (406 Ibn 'Abd al-Ḥakam : Kitāb Futūḥ Miṣr wa-Akhbārhā.) イブン・タグリー・ビルデ

ものでは、ムハンマド・アブドの便利なコンコーダンス (508 Muḥammad Fu'ād 'Abd al-Bāqī : al-Mu'jam al-Mafihris li-Alfāẓ al-Qur'ān.) とがある。マホメット伝に関しては、イブン・ヒシャーム (397 Ibn Hishām : al-Sīra al-Nabūya.) ワーキディー (471 al-Wāqidī : Maghāzī Rasūl Allāh.) イブン・サード (398 Ibn Sa'd : al-Ṭabaqāt al-Kubrā.) などの根本史料がすぐれており、最後のものは初期クルアーンの研究にも必要なものである。クルアーンについては、書、すなわちブハーリー (392 al-Bukhārī : Ṣaḥīḥ.) ムスリム (391 Muslim b. al-Ḥajjāj: Ṣaḥīḥ) ティルミジー (393 al-Tirmidhī : Sunan.) アブー・ダーウード (394 Abū Da'ūd. Sunan.) ナサーイー (395 al-Nasā'ī : Sunan) イブン・マージャ (396 Ibn Māja : Sunan.) の6大クルアーン集の善版が集った。クルアーン研究に欠くことのできないイブン・アルアスィールの「ルバーブ」(490 Ibn al-Athīr : al-Lubāb fī Tahdhīb al-Ansāb.) と「ウスド」(521 Ibn al-Athīr : Usud al-Ghāba.) スユーティーの「ニハーヤ」(459 al-Suyūṭī: al-Nihāya fī Gharīb al-Ḥadīth.) イブン・クタイバの「イスラーム」(428 Ibn Ḥajr : al-Iṣāba fī Tamyīz al-Ṣaḥāba.) カスタラーニーの「イルシャード」(520 al-Qasṭallānī : Irshād al-Sārī.) なども集った。またイブン・クリカーン (452 Ibn Khallikān : Wafayāt al-A'yān.) ヤークート (526 Yāqūt al-Rūmī : Irshād al-Arīb ilā Ma'rifa al-Adīb.) クティーブ・アルバグダーディー (485 al-Khaṭīb al-Baghdādī : Ta'rīkh Baghdād.) などの学者の列伝

ィー（475 Ibn Taghrī Birdī: al-Najūm al-Zāhira.）などがあり、アンダルシアに関してはクルトビーの「アンダルシア征服史」（467 al-Qurṭbī: Ta'rīkh Iftitāḥ al-Andalus.）がある。その他の地方史に、アズラキーの「メッカ史」（405 al-Azraqī: Akhbār Makka.）マクリージーの「エジプト地誌」（402 al-Maqrīzī: al-Khiṭaṭ. Cairo, 1911. 415. 同上 Bayrūt, 1959.）イブン・アサーキルの「ダマスクス史」（522 Ibn 'Asākir: Ta'rīkh Madīna Dimashq）イブン・アルアディームの「アレッポ史」（442 Ibn al-'Adīm: Ta'rīkh Ḥalab.）などがある。制度史に関しては、ジャフシヤーリーの「宰相と書記の書」（470 al Jahshiyārī: Kitāb al-Wuzarā' wa al-Kuttāb.）サービーの「宰相の書」（492 al-Ṣābī: al-Wuzarā'）などのほか、カルカシャンディーの大著「スブフ・アルアーシャー」（401 al-Qalqashandī: Ṣubḥ al-A'shā.）がある。最近の学者の歴史記述も少くないが、その代表的なものにラーフィイーの「エジプト国民史」（506 'Abd al-Raḥmān al-Rāfi'ī: Ta'rīkh Miṣr al-Qūmī.）の大著や、イラクの高名な学者アッザーウィーの「二征服間のイラク史」（404 al-'Azzāwī: Ta'rīkh al-'Irāq bayna Iḥtilālayn. ただし一部欠）と「イラク貨幣史」（504 'Abbās al-'Azzāwī: Ta'rīkh al-Nuqūd al-'Irāqīya.）などがあり、オマル・リダー・アルカッハーラの「アラブ部族事典」（482 'Umar Riḍā al-Kaḥḥāla: Mu'jam Qibā'il al-'Arab.）は、利用してみるとかなり便利なものである。

四　文学

およそイスラーム学の根本はアラビア語の正しい理解にあり、したがってアラビア語の辞書の蒐集には特に意を用いた。その結果、イブン・マンズールの「リサーン・アルアラブ」（420 Ibn Manẓūr: Lisān al-'Arab）ズバイディーの「タージ・アルアルース」（421 al-Zubaydī: Tāj al-'Arūs）をはじめとして、イブン・クタイバの「マアーニー」（432 Ibn Qutayba: Kitāb al-Ma'ānī al-Kabīr.）シーバワイフ（516 Sibawayh: Kitāb Sibawayh.）イブン・ドゥライド（503 Ibn Durayd: Kitāb Jumhura al-Lugha.）の語彙集など、重要な歴史的辞書類を集めることができた。「ブスターン」（483 al-Bustānī: al-Bustān.）は便利な簡便辞書として定評のあるもので、現地の学者が常に机上にそなえておくものはこれである。詞華集にイスファハーニーの大著「アガーニー」（413 al-Iṣfahānī: Kitāb al-Aghānī.）イブン・アブド・ラッビヒの「唯一の頸飾り」（418 Ibn 'Abd Rabbihi: al-'Iqd al-Farīd.）があり、歴史の史料としてもしばしば利用されるアラブ文学の領域には、イブン・クタイバの「情報の泉」（437 Ibn Qutayba: 'Uyūn al-Akhbār.）と、ジャーヒズの著書のうちの重要なもの4部（415 al-Jāḥiẓ, Abū 'Uthmān 'Amr b. Baḥr: al-Ḥayawān. 416 al-Jāḥiẓ: al-Bukhlā'. 417 al-Jāḥiẓ: al-Bayān wal-Tabyīn. 458 al-Jāḥiẓ: Kitāb al-Tāj fī Akhlāq. タヌーヒーの「苦労のあとのよろこび」（517 al-Tanūkhī: al-Farj ba'da al-Shidda.）があり、マカーマート文学では、ハマザーニー（436 al-Hamadhānī: Maqāmāt.）とハリーリー（497 al-Ḥarīrī: Ma-

qāmāt.）の両方がそろつた。ハーッジー・ハリーファの目録（518 Hajji Khalīfa: Kashf al-Ẓanūn.）は、アラビア語文献の目録としてはもつとも詳しいものであり、アズハル学院の蔵書目録（419 al-Maktaba al-Azhariya: Fihrist.）は、現存のアラビア語図書を調べるのに便利である。

このたびの蒐集は、もちろん将来のより大規模なるべき蒐集の出発点をなすに過ぎないものであるが、我が国における恐らく最初の組織的なアラビア語文献の蒐集としては、かなりの成功を収めることができたと言つて良いであろう。（嶋田襄平）

三、ペルシア語文献

㈠ 蒐集の目的と経過

現代イランの文化はサファヴィー朝時代の文化に直接繋がる。サファヴィー朝時代にイラン人は、引続き九世紀近くに亘る外民族（アラブ、トルコ、モンゴル人）支配を脱して、第十六世紀初頭から約二百二十年間、イラン国粋文化を発達させた。サファヴィー朝時代はイラン史上の重要な時期であるのに、これまで余り研究されず「サファヴィー朝全史」の如きものは未だに現われていない。サファヴィー朝イランの国家機構、社会構造、文化の基調は、現代イランの理解のためにも大いに研究されねばならぬ。サファヴィー朝史研究の材料は、多量のペルシア語、トルコ語、アラビア語の文献の他に、欧人の旅行記もあつて寔に豊富である。基本史料であるペルシア文献に就いてみると、その尨大な量の殆んが写本のままであり、テキストの刊行されたものは少い。刊本すら厳密な本文批判を経たものは乏しく、より良い写本に溯つて検討する必要は無くならない。かくてサファヴィー朝史の根本的な研究の第一段階は、既刊のテキストと共に、良好な写本を系統的に出来るだけ多く蒐集することである。

この第一段階の達成を目標にして、サファヴィー朝関係の史料を蒐集することにした。サファヴィー朝関係のペルシア文写本は、イラン、トルコは勿論、イギリス、フランス、ドイツ、ソ連等の各国の図書館に蔵されているが、最も多く所蔵されている場処の一つは、「大英博物館」である。そこで先ず「大英博物館」に蔵され、既に「目録」（Catalogue of the Persian manuscripts in the British Museum by C. Rieu. 3 vols & supplement, London 1879–1895.）によつてその内容、史料価値の確かなものを選んでそのマイクロフィルムを取寄せることにした。幸にして「大英博物館」当局の好意により、これらのペルシア文写本のマイクロフィルムを、アジア地域総合研究施設の一つ「東洋文庫」に備えることが出来た。これによつて「大英博物館」所蔵のサファヴィー朝関係ペルシア文写本の主要なものはすべて「東洋文庫」で見ることが出来るようになつた。なお国立国会図書館所蔵の稀覯の参考文献若干のマイクロフィルムを、同図書館の好意によつて蒐集することが出来た。これらのマイクロフィルムによつて将来された文献は、次のリストに示す如く総計三十点である。

㈡ 蒐集文献リスト

次に、マイクロフィルムによつて蒐集した写本、刊本を、内容若しくは製作年代によつて分類し、列記して示す。各文献の書名（必要あるものは邦訳を附す）、著者名を挙げ、括弧（　）内に原書の函架番号、葉数を記す。

I．大英博物館所蔵サファヴィー朝関係ペルシア文写本

1. Tārīkh-i Shāh Ismā'īl-i Ṣafavī（サファヴィー家のシャーイスマイールの歴史）of an anonymous author (Or. 3248, foll. 307).

2. An untitleld book of a history of Shāh Ismā'īl and Shāh Ṭahmāsp to A.H. 957/1550 of Maḥmūd b. Khwāndamīr (Or. 2939, foll. 245).

3. Shāh-nāma-yi Ismā'īl（イスマイール帝王賦）of Qāsimī Gūnābadī (Add. 7784, foll. 184).

4. Shāh-nāma-yi Ṭahmāsp（タフマースプ帝王賦）of Qāsimī Gūnābadī (Or. 339, foll. 386).

5. Tārīkh-i 'Abbāsī（アッバースの歴史）of Jalāl-i Munajjim (Add. 27241, foll. 359).

6. Afḍal al-tavārīkh（歴史の精華）of Faḍlī Iṣfahānī (Or. 4678, foll. 275).

7. Jarūn-nāma（ジャルーンの書）of Qadrī (Add. 7801, foll. 76).

8. Rauḍat al-Ṣafavīya（サファヴィーの楽園）of Mīrzā Bēg b. Ḥasan Junābadī (Or. 3388, foll. 402).

9. 'Abbās-nāma（アッバースの書）of Ṭāhir Vaḥīd Qazvīnī (Add. 11632, foll. 156).

10. Ibid. (Or. 2940, foll. 247).

11. Majma' al-inshā（文書集）of Abū 'l-Qāsim Ḥaidar Bēg Ēv-oghlī (Add. 7688, foll. 285).

12. Qiṣaṣ al-Khāqānī（可汗物語）of Valī-Qulī Shāmlū (Add. 7656, foll. 180).

13. An untitled book of an account of the life and times of Rustam Khān of Bījān (Add. 7655, foll. 89).

14. Dastūr-i shahriyārān（帝王の規範）of Muḥammad Ibrāhīm b. Zain al 'Ābidīn Naṣīrī (Or. 2941, foll. 250).

15. Favā'id-i Ṣafavīya（サファヴィー朝の優越）of Abū' l-Ḥasan b. Ibrāhīm Qazvīnī (Add. 16698, foll. 156).

16. Tārīkh-i Īlchī-yi Niẓām-Shāh（ニザーム・シャーの使者の歴史）of Khwurshāh b. Qubād al-Ḥusainī (Or. 153, foll. 122).

17. Zubdat al-tavārīkh（歴史の精髄）of Kamāl Khān Munajjim (Or. 2060, foll. 9-26 only).

18. Khuld-i barīn（天上の楽園）of Muḥammad Yūsuf Vālih (Or. 4132, foll. 290).

19. Zubdat al-tavārīkh（歴史の精髄）of Muḥammad Muḥsin Mustaufī (Or. 3498, foll. 254).

20. Mukhtaṣar-i Mufīd（ムフィードの要説）of Muḥammad Mufīd Mustaufī Yazdī (Add. 10583, foll. 275).

21. Sulūk al-Mulūk (君主の起居) of Faḍl Allāh b. Rūzbihān (Or. 253, fol1. 173).

22. Thirty-five sheets of royal firmans (Or. 4535).

II. 大英博物館所蔵サファヴィー朝関係史料刊本

23. Ṣafvat al-ṣafā (純一精粋) of Tavakkulī b. Ismā'īl Ardabīlī Ed. by Aḥmad b. Karīm Tabrīzī, Bombay, A.H. 1329/1911 (14779. g. 19).

24. Fārs-nāma-yi Nāṣirī (ナーシルのファルースの書) of Hasan Fasā'ī, 2 vols., Tehran, A.H. 1313/1894-6 (L4773. k. 13).

25. Sharaf-nāma (シャラフの書) of Sharaf Khān Bidlīsī. Scheref, Nameh, ou Histoire des Kourdes par Scheref, Prince de Bidlis, pub. par V. Vélïaminof-Zernof, 2 vols., St. Pétersbourg, 1860-1862 (757. g. 33, 34).

26. Ibid. Chèref-Nâmeh ou Fastes de la Nation Kourde par Chèref-ou'ddîn, tr. par F. B. Charmoy, 2 vols., St. Pétersbourg 1868-1875 (757. h. 45).

27. Tadhkirat-i aḥval (行状覚書) of Muḥammad 'Alī Ḥazīn, The life of Sheikh Mohammed Ali Hazin ed. by F. C. Belfour, London, 1831 (1, 4003. d. 2 (2)).

III. 国立国会図書館所蔵ロシア文参考文献

28. Obolenskii, M. A. ed. Ярлыкъ Хана Зодотой Орды Тохтамыша къ Польскому Королю Ягайлу, 1392-1393 года (金帳ハン・トフタミシュが1392-1393年ポーランド王ヤガイルに授けた勅書). Казань, 1850 (950-012).

29. Berezin, I. N. ed. & tr. Шейбаниада: Исторія Монголо-Тюрковъ на Джагатайскомь діалектѣ, сь переводом, примѣчаніями и приложеніями (シェイバニアーダ。チャガタイ方言のモンゴル・トルコ史訳, 註, 附録), Казань, 1849 (950. 82-B492b).

30. Материалы по истории Туркмен и Туркмении (トルコマン族・トルコマン国史料集), т. 1, Москва, 1939 (958. 4-M 425).

(3) 蒐集文献の内容と史料価値

このリストに示された文献の内容は、題目から略々察せられるが、始めの1—15の十五文献は、サファヴィー朝の各時期を取扱っており、16—19の四文献はサファヴィー朝時代に書かれたイスラム世界史で、そのサファヴィー朝関係の記事は、同時代史料として重要である。20—21の二文献は地理、政治論、文書集であり、23—27の五刊本は、伝記、地誌類であって、何れもサファヴィー朝史研究に欠くべからざるものである。最後の28—30の三ロシア語文献は、故稲葉稙吉氏の旧蔵にかかわり、キプチャク・ハン国、ウズベク族、トルコマン族の歴史に関するものであるが、サファヴィー朝期の史料に見える制度上の術語の解明に大いに役立つ。

次に「大英博物館」より得たペルシア語文献(リストの1—27)

の各々の製作年代、内容、写本作成の年代、史料価値に就いて簡単に説明してみよう。

1「サファヴィー家のシャー・イスマールの歴史」シャー・タフマースプ時代(1524—1576)の作。Khwāndāmīr の Habīb al-Siyar（美徳の伴侶）に一致する記事が多い。十六世紀の写本。細密画二十一葉あり。

2「シャー・イスマイールとシャー・タフマースプの歴史」ホラサンの諸事件、ウズベク族の侵入に就いて詳しい。写本年代は A. H. 1042/1632.

3「イスマイール帝王賦」A. H. 940/1533-4 作。マスナヴィー調の史詩。写本年代は A. H. 948/1541. 挿絵あり。

4「タフマースプ帝王賦」マスナヴィー調の史詩。写本年代は A. H. 1180/1767. 本写本は Shāh-nāma-yi Ismā'īl（イスマイール帝王賦）、Shāh-Rukh-nāma（シャー・ロフの書）を含む。

5「アッバースの歴史」その生誕から A. H. 1020/1611 に至るアッバース大帝の歴史。Iskandar Munshī の Tārikh-i 'ālam-ārā-yi 'Abbāsī（世界を飾る者アッバースの歴史）と共に、アッバース大帝史研究の重要史料。十七世紀の写本。

6「歴史の精華」アッバース大帝時代に書かれたサファヴィー朝史。写本年代は A. H. 1049/1639. 本写本はシャー・タフマースプの治世の記事のみを含む。

7「ジャルーンの書」イマーム・クリー・ハンによるポルトガル人からのホルムズ奪回(1623)をマスナヴィー調で綴つたものジャルーンとはホルムズの別名。写本年代は A. H. 1109/1697. 挿絵あり。

8「サファヴィーの楽園」サファヴィー朝の起源からシャー・サフィーの治世の始め(1628)に至るまでの歴史。写本年代は A. H. 1052/1643. 本写本の末部には若干の脱落がある。

9「アッバースの書」シャー・アッバース二世の治世の始め十五年間(1642—1656)の歴史。十七世紀の写本。

10　同上異写本。シャー・アッバース二世の治世第二十二年(1663)まで書き足されている。写本年代は A. H. 1152/1739.

11「文書集」イラン及び近隣諸国の君主達の往復書簡、特許状を集めたもの。第二巻にサファヴィー朝の初七代の間の文書が収められている。十七世紀の写本。

12「可汗物語」シャー・アッバース二世の歴史。その前代の記述を含む。写本年代は A. H. 1128/1716?

13「ルスタム・ハンの生涯とその時代」アッバース大帝からシャー・アッバース二世の時代にかけて活躍したジョルジア出身の将軍ルスタム・ハンの歴史。写本年代は A. H. 1104/1693.

14「帝王の規範」　サファヴィー朝最後の君主シャー・スルタン・フサインの歴史。十八世紀の写本。本写本の記事は A. H. 1110/1698—9 で中断されている。

15「サファヴィー朝の優越」A. H. 1211/1796—7 年に至るサファヴィー朝及びサファヴィー朝の叛乱者達（アフガン族、カチャラティー族、アフシャール族、アブダリー族、カージャール族）

の歴史。十九世紀初の写本。

16「ニザーム・シャーの使者の歴史」A.H. 970/1562—3 に至る世界史。その第六巻にシャー・イスマイル、シャー・タフマースプの歴史を含む。写本年代は A.H. 972/1565. 本写本は第六巻後半部、第七巻のみを含む。

17カマール・ハンの「歴史の精髄」A.H. 1063/1652 に至る世界史概要。サファヴィー朝の歴史はかなり詳しく記されている。本写本はシャー・サフィー、シャー・アッバース二世両時代の記事のみを含む。

18「天上の楽園」A.H. 1078/1667—8 年に書かれた世界史。その第八巻がサファヴィー朝史（A.H. 1071/1660—1 まで）にあてられている。写本の年代は A.H. 1247/1831. 本写本は第八巻の第六章（シャー・サフィー史）、第七章（シャー・アッバース二世）のみを含む。

19 ムクシンの「歴史の精髄」A.H. 1154/1741—2 年に書かれた世界史。サファヴィー朝末期、ナーディル・シャー勃興に就いて他に見られぬ記事がある。十八世紀の写本。恐らくは自筆本。

20「ムフィードの要説」ラホールで A.H. 1091/1680—1 年に書かれたイランの地理。サファヴィー朝に関する記事が見出される。写本の作成年代は多分 A.H. 1091/1680 年であり、本写本の一部分は自筆本であろう。

21「君主の起居」A.H. 920/1514 年、ウズベクのウバイドラーフ・ハンに捧呈された政治論。写本年代は A.H. 1089/1678.

22「特許状三十五通」 これに就いてはミノルスキー教授の解説がある（Tadhkirat al-mulūk, tr. & explained by V. Minorsky, London, 1943, 199—203）。

23「純一精粋」 A.H. 759/1358 年頃の作。サファヴィー朝の始祖サフィー・ウッディーンの生涯、その言行、奇蹟を記す。

24「ナーシルのファールスの書」ファールス州の地理と歴史。

25 26「シャラフの書」 A.H. 1005/1596 年作。クルド族の歴史。十六世紀の記事は特に詳しく、イラン、トルコ、中央アジアの諸事件の記述が見出される。

27「行状覚書」 ハズィーンの自叙伝。A.H. 1154/1742 年デーリーで書かれた。サファヴィー朝末期、ナーディル・シャー時代の諸事件の記事あり。

㈣今後の計画

ここに蒐集し得たサファヴィー朝関係史料を基にして次のような今後の計画を樹てている。

㈠蒐集文献の整理。これまでに蒐集した文献の利用の便宜をはかる。先ずマイクロフィルムを原寸大に引伸して読解し易いようにする。更に詳しい解題をつけ、参考文献を示し、今後の研究に資する。

㈡蒐集の続行。「大英博物館」所蔵のサファヴィー朝関係史料の主要なものは蒐集し得たが、これに引続き各国図書館（例えば、フランスの「国民図書館」、イギリスの「インド庁図書館」「ボードレイアン文庫」、「ケムブリッジ大学図書館」、ドイツの「西ド

イツ図書館」、イランの「国会図書館」）の当該史料の蒐集に進みたい。レーニングラードには、サファヴィー朝関係の最も貴重な史料（発祥地アルダビール占領の際戦利品としてロシアに運び去られたものあり）があるので、ソ連のアカデミーに連絡して交渉してみたいものである。またイスタンブールのモスクの文庫には良好な写本が多量に蔵されているので、その蒐集にも着手したい。これと共に現地のイランは勿論、各国で関係史料の刊行、訳本の出刊が相次いでいるので、それらの蒐集にも遺漏なきを期している。なお、現在我が国に将来されているサファヴィー朝関係史料の所在を調べて、本蒐集計画が一層円滑に行われるようにしたい。

これらの文献蒐集によつて、我が国にサファヴィー朝イランの本格的な研究が可能となり、すぐれた成果の挙げられることを期している。

（本田　実信）